奈良・平城京（へいじょうきょう）跡右京七条一坊十五坪

1　所在地　奈良市六条町

2　調査期間　第三四九次調査　一九九六年（平8）五月～七月

3　発掘機関　奈良市教育委員会・奈良市埋蔵文化財調査センター

4　調査担当者　三好美穂

5　遺跡の種類　都城跡

6　遺跡の年代　奈良時代、室町時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は老人保健施設建設に伴う事前調査である。調査地は平城京の条坊復原では、右京七条一坊十五坪の北東隅にあたり、調査地の東側には十・十五坪の坪境小路西側溝が想定されている。これまでに十五坪内では、一九八五年度に奈良市教育委員会が西辺部で調査（第九七次調査）を行なっており、

（奈　良）

西一坊大路東側溝、奈良時代の掘立柱建物・塀・井戸、平安時代の井戸などを検出している。平安時代の井戸は、井戸枠に「湯屋□延久参年四月十日」と墨書された曲物が使用されており、遺構の構築時期や出土遺物の実年代を知る手がかりを得るなどの成果をあげている（本誌第八号）。

これらの成果を踏まえ、小路西側溝の検出及び奈良～平安時代の宅地の様相を把握することを目的として、約一〇八〇㎡の調査区を設定した。

調査の結果、十・十五坪の坪境小路西側溝、奈良時代の掘立柱建物四棟、掘立柱塀一条、井戸二基、土坑一基、室町時代の粘土採掘坑、奈良時代以前の旧河道を検出した。

粘土採掘坑は、調査区全体の約七〇％を占めており、検出面からの深さは、浅い所で〇・三m、深い所では一・〇mもある。土坑内の埋土は、黄褐色粘土のブロックを含んだ灰色粘土である。埋土からは、奈良時代の土器類、軒丸瓦、石鈎（丸鞆・巡方）の未成品、鎌倉時代の瓦器、室町時代の瓦質土器擂鉢が出土した。瓦質土器擂鉢を検出した地点のうち六ヵ所は、意識的に据えて埋められたかのような状態であった。

これらの粘土採掘坑により、奈良時代の遺構の多くが壊されたらしく、旧河道上に構築された遺構がかろうじて残存するだけであった。建物の柱掘形は一辺〇・六mと比較的大きいものが見られるも

のの、発掘区外へ続くものや柱掘形が壊されているなど、建物規模がわかるものがない。

木簡が出土した井戸は、発掘区中央部付近で検出した。掘形の上部〇・三m程は粘土採掘坑で壊されていたが、その下は深さ三・一mまで残存していた。掘形は東西三・四m南北三・六mの平面方形である。井戸枠は抜き取られたらしく残存していなかった。埋土から、木簡、奈良時代中頃の土師器・須恵器・奈良三彩小壺蓋・丸瓦・平瓦が少量出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「西一二三四五六七　(220)×(23)×5　081

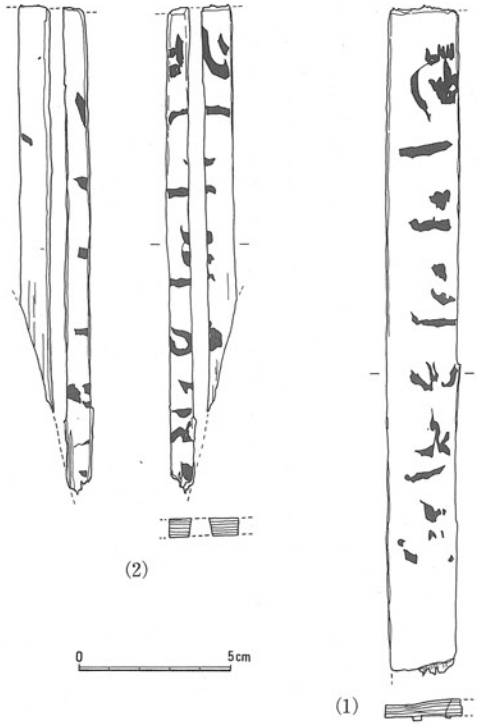
(2) ・「北一二三四□□〔五六カ〕　(158)×(8+9)×6　081

・「□□□□□〔四カ〕□　(158)×(8+9)×6　081

(2)はわずかの欠失部をはさんで文字が接合する二片からなり、墨書後に割り裂いていることがわかる。墨書はいずれも方位と数字を記したものであるが、用途は不明。

木簡の釈読については、奈良国立文化財研究所の舘野和己・渡辺晃宏・古尾谷知浩（当時）・山下信一郎の諸氏のご教示を得た。

9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成八年度』（一九九七年）

（三好美穂・松浦五輪美）